

日域無双の禅林

東香山大乘寺に

東隆眞先生が晋山

善光寺住職 黒田 武志

新緑に萌ゆる初夏。爽やかな六月八日。

古都金沢の名刹大乘寺に、前駒沢女子大学学長東隆眞先生が新命住職として晋山されました。

大乘寺は、正応二年（一二二八年）曹洞宗高祖・道元禅師の高弟、徹通義介禅師（永平寺第

三代）が開創。足利尊氏の祈願所ともなったという歴史ある古刹です。野田山丘陵の広大な敷

地、樹齢数百年もの古木に囲まれ、仏殿・山門・法堂などは、

国の重要文化財に指定されている仏教遺産です。この天下の名刹東香山大乘寺、その第七十二

世を継承するに、まことにふさわしいお方であります。

ご存知のように、師は、日本教育界の代表であり、教育者としてのご活躍がたいへん長く、

学校法人駒沢学園に四十年間奉職、その間中学校・高等学校の校長、そして短期大学・女子大

学の教授・学長を歴任されました。文学博士の師は、瑩山禪師研究会として比類なく、ライフワークともなっているそのご研究の真髄は、数多くの著書として残されております。

東隆眞先生と私は、大学・大学院時代の同窓知己。同学の畏友であり、私は横浜善光寺留学僧育英会の理事として設立より今日まで、並々ならぬご支援ご助力をいただけてきたという、深い法縁をして今日にあります。それだけに今日の慶事、それは私の無上の喜びであり誇りでもあります。

師に対し、私は新寺建立以来、発願する諸々につきご指導を仰

いでまいりました。都度肝にし
て要なるジャッジ。私の励みと
なり、自信となり、活動エネルギー
の源泉となつて下さったのです。

師は、常に大都会にあつて教
育界のみならず宗門内外の各種
行事にも多々参画なされており
ます。一寺に埋もれることなく、
宗門のためご研究と執筆活動を
通して、私どもに晋く影響させ
て頂きたいと願ったこともあり
ました。しかし師のご決意、原
点復帰、初心忘れず、道場に身
を挺する覚悟を承り、あまりの
潔さにただただ感服・敬服。か
くなる上は豊かな学識とご経験
を十二分に生かされ、宗風の高
揚と山門興隆にお力をお尽くし

頂くことを、唯々願わずにはお
れませんでした。

さていよいよ大乘寺新命住職
晋山が、莊嚴嚴肅な雰囲気の中執
り行われる。私の心は溢れんばか
りの感動で渦巻いておりました。
五人の侍者の方を従えた東新
命住職、総門で最初の法語を誦
み上げ、多数の檀信徒が迎える
参道を、山門・仏殿・法堂へと
おすすみになり、宗門内外の要
人や檀信徒が見守る中、儀式は
順々と進んでゆきます。

いよいよ晋山上堂。
まずは諸疏宣読の儀。「山門疏」
を大乘寺後堂・堂監土田國和老師
（山形県正光寺ご住職）。『門葉疏』
を中澤玄爾老師（秋田県宝蔵寺

（ご住職）。引き続き私は「道旧疏」を宣読させていただきました。

「道舊疏」

日域無双の禅林 東香山大乗寺
は 開祖徹通義介禅師の偉徳を
奉じ 並に観音大薩埵の威神力
に依る加賀の大法窟なり
新命 天籟隆眞老大宗師
本月本日の吉辰を以て晋山開堂
の盛儀を挙行せる

小納

新命老大宗師と等しく 一佛両
祖の正法を求め
曹洞宗学を振り 堂奥に出入す
正法眼蔵 行学一如の四十餘年
なり
此に於て 幾多懐舊の想念有り

今日の典禮 慶賀の至りに勝え
ず 謹んで単疏を呈して
以て賀懇を伸ぶるなり

夫れ 惟みれば

外には 浮華を去て 駒大の宗
学を博覧し
学会に満つる
内には 實徳を充たし 諸嶽の
選佛 活機の禅に参玄す
福慧雙修 智行両全たり
更に又 駒沢学園に学を弘め
承陽の玄旨に潜心し 祖息を仰
ぎ 教育機関に職を奉じては瑩
山の家風を追慕して 法幢を樹
す
今また 本師龍潭老鐵漢の後席
を担い 大乘禅寺に晋住するの
機縁を得たり



付して願くは

分座堤綱 洞山玄門を開顕して
無盡蔵

拈槌豎拂 海會の大衆に垂化し
て 最上の機たらんことを

維時 平成十五年六月八日

横浜善光寺守塔 道舊比丘

武志 謹んで疏す

私は、慶賀の念をこめて奏上
させて頂きました。

やがて師は、須彌壇上（説法
の法座）に登座。香をたき、国
家の隆昌と安泰、人々の幸福を
祈念し、関係者への感謝報恩の
誠を捧げ尽したのち、朗々たる
お声にて、

「朝朝、大乘寺と共に起き、夜

夜、大乘寺と共に眠り、大乘寺
と一体とならんことを願う」と
胸中のご決意を吐露なさいまし
た。そして、大乘寺専門僧堂安
居僧や来賓の僧たちとの問答が
活発に展開されました。

須彌壇上の風光を問われた師
は、即座に「独坐大雄峯」と示
され、「音なきところ、これ真の
音。響きなきところ、これ真の
響き」と。私はその何ものにも
妨げられない先生の澄み切った
無碍のご境地に、深い感銘を受
けました。又この家風峻厳たる
古道場で家風について問われる
と、「拙僧に家風なし。無心にし
て道にかなう」と。さらに「仏
法」についての問「高祖大師示し

ていわく。一毫も仏法無し」と。
太祖大師示していわく、平常心
是れ道」まさにその教えそのまま
にいかなる難問にも、何物にも
とらわれることない無心・平常
心のままで凛として即答なされ
た。私の心に印象深く刻まれ、
また堂内のあふれんばかりの人々
の心にも、あたかも砂に水が浸
み込むがごとく心地よく沁み渡っ
ていくように思いました。

続いてのご祝辞には、有田恵
宗・管長御專使（宗務総長）、武
田秀嗣・永平寺御專使（永平寺
副監院）、伊東盛熙監院・總持寺
御專使、三香美英舜石川県宗務
所長、檀信徒代表総代本多政光
氏が読み上げれば、東先生はこ

れを受けて、

「文字通り私は非力非才である。どうかこれからも倍旧のご指導ご支援をお願いしたい」と述べられました。

掉尾は、開山歴住諷経の導師を務めた前曹洞宗管長前総本山總持寺貫首・板橋興宗禪師が、「東隆眞大和尚は名声赫々たる学者だが、単なる学者ではない。少年時代、四国の徳島県にある太祖瑩山禪師初開の道場・成満寺で渡辺頼応老師について剃髮得度、そして東海道をわらじで歩いて鶴見の總持寺にたどりついて安居した。私も頼応老師の師翁に当たられる渡辺玄宗老師が、大乘寺から曹洞宗大本山總持寺

貫首に登ったときに頭を剃ってもらい、東住職の兄弟子にあたる。不思議な法縁です。どうぞこの大乘寺をさらに立派な修行道場にしていただきたい」と、垂示なさいました。

こうして晋山の盛儀は無事円成致しました。

尚、晋山式の前夜、加賀百万石の城下町高尾の森のホテルで、同期同窓の「駒大三心会（会長は東先生、副会長は私が勤めている）」の面々がこの慶事にと馳せ参じ、翌日に迎える荘厳な儀式を前に、感動的な祝宴が催されておりました。

青春をともし過ぎ、熱き佛教論を交わした三心会の同志で

す。皆一同に四十年の時を遡ったかのように、親しく懇談したり歌ったりと、慶事にふさわしく盛り上がった祝宴となりました。東先生のご晋山に随喜し、遠方よりご参加くださった三心会の皆様は次の通りです。

五十嵐隆暁	長野県	定津院
大寺 忠章	埼玉県	西光寺
小倉 玄照	岡山県	成興寺
松田 憲英	新潟県	宝寿院
石井 孔寛	福島県	梵音寺
石附 周行	神奈川県	最乗寺
市河 雄峰	三重県	長樂寺
上本 英雄	愛媛県	観音寺
梅村 欣司	岐阜県	竜雲寺
大八木春邦	山形県	保春寺
影山 秀和	愛知県	智蔵院

吉川	弘眼	東京都	勝興寺
佐藤	憲雄	新潟県	永林寺
篠崎	知足	長野県	地藏寺
清水	政文	岐阜県	桂昌寺
武山	梅芳	宮城県	江林寺
田村	淳一	山形県	林泉寺
辻村	英俊	熊本県	金性寺
寺口	良英	長野県	宗徳寺
洞外	文隆	神奈川県	本瑞寺
平岡	正堂	大分県	興禅院
藤田	俊孝	東京都	賢崇寺
宮下	博一	長野県	長谷寺
村上	義教	東京都	観蔵院
山口	碩永	三重県	光明寺
留守	孝道	宮城県	福厳寺

この三心会を代表し新潟県永
林寺の佐藤憲雄老師。さらに山

出保金沢市長、駒沢学園伊藤文
雄理事長・学長、東先生の金蘭
の友であるシーエスエム田中義
信社長、地元を代表して掘宗哲
老師（前大乘寺西堂）が祝辞を
述べ、乾杯の発声は大乘寺責任
役員の羽仁素道老師（迦葉山住
職）。三心会からは、代表して洞
外文隆老師（神奈川県 本瑞寺）
が、東新命ご住職に対して記念
品の目録を贈呈。その後、あちこ
ちで交歓の笑顔、よろこびの歌
声が響き渡っております。

でもある東新命住職を迎えるに
あたり、金沢の聖地であり文化
遺産でもある大乘寺を護り、隣
接地を公園化して緑豊かな心安
らぐ空間にしたい。五年後には
徹通禅師の七百回遠忌を修行さ
れるとうかがっております。市
として防災面で援助することを
お約束いたします」

と述べられたのが、たいへん印
象深く残りました。無心の尊い
お方の周りには、自然に、その方
を支援する尊い方々が、み仏のお
導きで現れるのですね。

師の最も得意とするところの
佛教による人づくり…。

私も師と同じ時代を駆け抜け、
同じ仏の道を通して、仏天の加

護は申すに及ばず、宗教家として、研究家として若き人々と接し、人材の育成・教育にご一緒できますこと、誠に欣快に耐えない思いです。

大典を終え、霊峰東香山の新緑が一段と光彩を放つ。

やがて金沢を後にし帰路につきました。が、列車の中、師が言い放った「大乘寺と共に起き、大乘寺と共に眠り、大乘寺と一体になる」この語が胸を衝き、師と私の四十年を思い起こしつつ、いよいよ禅風高揚にご専念され、その力が普く天地にみまざるよう祈念し、心の内で合掌し続けておりました。(了)

